

人間的行為と人間の行為

——「考量された意志」における「理性」の役割——

山田 晶

目次

- 第一章 人間的行為と人間の行為(一)
—— homo inquantum est homo の意味 ——
- 第二章 人間的行為と人間の行為(二)
—— dominus suorum actuum についての疑問 ——
- 第三章 人間的行為と人間の行為(三)
—— はたらきの能力としての ratio et voluntas ——
- 第四章 人間的行為と人間の行為(四)
—— ex voluntate et deliberata の意味 ——
- 第五章 人間的行為と人間の行為(五)
—— voluntas deliberata における ratio の役割 ——
- 第六章 人間的行為と人間の行為(六)
—— ratio において考量されるべきことから ——
- 第七章 人間的行為と人間の行為(七)
—— ratio の考量の行われるべき空間 ——
- 第八章 人間的行為と人間の行為(八)
—— 理性と感覚との相違についての問題 ——
- 第九章 人間的行為と人間の行為(九)
—— 技術的理性についての問題 ——
- 第十章 人間的行為と人間の行為(一〇)
—— 反省的理性の問題 ——

第一章 人間的行為と人間の行為 (一)

—— homo inquantum est homo の意味 ——

一 トマスは、『スンマ』第二部の一、第一問一項主文において次のようにいっている。

人間によってなされる諸々の行為のなかで、固有の意味で「人間的行為」*actio humana*といわれるのは、ただ「人間であるかぎりにおける人間」*homo inquantum est homo*に固有である行為だけである。ところで人間が他の諸々の非理性的被造物と異なるのは、人間が「自己の行為の主」*suorum actuum dominus*である点である。それゆえ、固有の意味で「人間的行為」と呼ばれるのは、ただ人間がその主であるところの行為だけである。しかるに人間が自己の行為の主であるのは、理性と意志とによる。∴それゆえ、固有の意味で「人間的行為」といわれるのは、熟慮された或いは思量された意志から生ずる *ex voluntate deliberata procedit* 行為だけである。これに対し、何かそれ以外の行為が人間に属するとすれば、それらの行為はたしかに「人間の行為」*actio hominis*ということができる。しかしそれらの行為は、人間であるかぎりの人間のなす行為ではないから、固有の意味で「人間的行為」ということはできない。

二 ここでトマスは、「人間的行為」*actio humana*と「人間の行為」*actio hominis*とを区別している。そして倫理学の対象となるのは「人間的行為」であって「人間の行為」ではないという。それ

ゆえ「人間的行為」はまた「道徳のないし倫理的行為」*actio moralis*ともよばれる。ここに「道徳的行為」というのは、道徳的に秀れた行為という意味ではなくて、善にせよ悪にせよ、とにかく道徳的価値判断の対象となりうる行為という意味である。

三 では、「人間的行為」とはいかなる行為をいうのであるか。それは、「人間であるかぎりにおける人間」*homo inquantum est homo*がなす行為、すなわち、「人間であるかぎりにおける人間」に固有である行為である。では「人間であるかぎりにおける人間」とは何を意味するか。

四 このことばの意味を理解するために、われわれは、この表現のうちに二度出てくる「人間」ということばの意味を区別しなければならぬ。さもなくて、両者が全く同じ意味だとすれば、「人間であるかぎりの人間」という表現は同語反復となる。ではこの二つの「人間」の意味は、どのようにことなるか。

五 まず、「∴であるかぎりの」という限定がここにつけられている「人間」から、この「∴かぎりの」という限定をとりはずして、そのような限定を受ける以前の「人間」そのものを考えてみると、その意味での「人間」とは、個々の具体的に存在している人間であり、それは身体と魂とから成っている。身体であるかぎり物体 *corpus* であり、魂を有するかぎり生物 *animal* である。またもつと一般

的見地からみれば、存在するものであるかぎり一個の存在者 *ens* である。

六 それゆえ一個のまだいかなる限定も受けない「人間」、すなわち、いま「人間」という名で呼ばれている「もの」は、物体でもあり、生物でもあり、存在でもある一つの「もの」である。しかしこの「もの」は、物体と生物と存在者という三つの「もの」から成るのではなくて、「もの」としては一つである。ただ一つの「もの」でありながら、物体という性格、生物という性格、存在者という性格を有しているのである。

七 それゆえ、今「人間」と呼ばれているこの「もの」は、これをその物体という性格に即して考察することができ、また生物という性格に即して考察することもでき、存在者という性格に即して考察することもできる。第一の場合には、「物体であるかぎりの」*quantum est corpus* という限定のもとにこの「人間」という「もの」は考察されるのであり、第二の場合には、「生物であるかぎりの」*quantum est animal* という限定のもとに考察されるのであり、第三の場合には、「存在者であるかぎりの」*quantum est ens* という限定のもとに考察される。

八 ところで、今「人間」と呼ばれている「もの」は、それぞれそれが所有している三つの性格のゆえに、このように三つの「…で

あるかぎりの」という限定のもとに考察されうるが、しかしこのものの有している性格はただこの三つに限られることはない。それ以外のさまざま「…であるかぎりにおける」という限定のもとに考察されうるであろう。そしてそれぞれの限定における考察のもとに、この「人間」という名のもとに呼ばれているものは、それが有しているさまざまな側面をいつそうあきらかに考察者の前に現わしてゆくであろう。

九 しかしながら、次のことに注意しなければならない。すなわち、「人間」と呼ばれる「もの」が物体であるかぎりにおいて考察される時、物体であるのは人間だけではなく、他にさまざまのものが物体であるから、それらすべての物体に共通する性格が、この「限りにおける」考察のもとに「人間」についてあきらかにされてゆくであろう。すなわち、「物体であるかぎりにおける」という限定のもとに人間が考察される時には、人間の他のすべての物体と「共通する性格」があきらかにされてゆくであろう。同じことは、人間が「生物であるかぎりにおいて」考察される場合にもいわれうるし、「存在者であるかぎりにおいて」考察される場合においてもいわれうる。そしてこの第三の場合において人間は、他のものと最も共通する性格をあらわすことになる。それゆえこれらの考察においては、人間と呼ばれるものの、他のものと「共通する側面」があきらかにされてゆくのである。

一〇 ここで次の問題が生ずる。人間という名によってよばれる「もの」を、上記のように他のものも有するものどもと共通する側面においてではなく、他のものとも共通しない側面において、すなわち、ただ人間だけが有しており、人間以外のいかなるものも有していない側面において、すなわち、人間の固有な側面 *proprie homini convenit* において考察するにはどうしたらよいか。そもそもそのようなことは可能であろうか。

一一 それは可能である。それは、この人間という「もの」だけが有しており、他のいかなるものも有していない人間の性格、すなわち、人間の固有性 *proprietas* に着眼することである。そして人間をその「固有性の性格のもとにおいて」 *sub ratione proprietatis* みることである。それが「人間であるかぎりにおける人間」について考察することである。それゆえここに「人間であるかぎりにおける」 *inquantum est homo* といわれる場合の「人間」は、物体でもあり生物でもあり存在者でもある人間、すなわち、これらの性格を一身のうちも含んでいる具体的全体としての「人間」ではなくて、他のすべての「もの」から区別された人間に固有な、いわば人間固有性としての人間である。すなわち、「固有に人間的」 *proprie humana* 性格を有するものとしての人間である。それゆえ、人間を特に「人間であるかぎりにおいて」考察するとは、人間を他のものと共通する共通の共通な性格のもとにおいてではなく、特に他のものと区別された人間の固有性のもとに、考察することに他ならない。

第二章 人間的行為と人間の行為 (二)

—— *dominus suorum actuum* についての疑問 ——

一二 人間を特に「人間であるかぎりにおいて」考察するとは、人間を他のものと共通する性格のもとにおいてではなく、特に他のものと区別された人間の固有性のもとに考察するということである。「一一」では人間の固有性はいかなる点に存するか。トマスはいう。ところで人間が他の諸々の非理性的被造物と異なるのは、人間が「自己の行為の主」 *suorum actuum dominus* である点である。それゆえ固有の意味で「人間的行為」と呼ばれるのは、ただ人間がその主であるところの行為だけである「一一」。

一三 これによれば、人間であるかぎりの人間の固有性は、人間が自己の行為の「主」 *dominus* であることである。人間以外の非理性的被造物は、自己の行為の主ではない。ただ人間のみが、自己の行為の主たりうるのである。では人間が自己の行為の主であるとはいかなることか。

一四 ここでわれわれはこの説に対して素朴な疑問をいだく。ただ人間だけが自己の行為の主であるというのは本当であろうか。或る意味ですべてのものが、何らかのはたらきをなすかぎりにおいて、そのはたらきの主となつていっているのではないか。トマスもいつているように、はたらきをなすのは普遍としての「もの」ではなくて、個

物としての「もの」である。動いているのは球一般ではなくて「この球」であり、落ちているのは石一般ではなくて「この石」であり、輝らしているのは光一般ではなく、この電燈の「この光」であり、熱しているのは熱一般ではなくて、この炭火の「この熱」である。

いかなる物体も何らかのはたらきをなすかぎりにおいて、そのはたらきの主体となつてはたらいっているものであり、「はたらき」を広い意味での行為と取り（ラテン語では「はたらき」も「行為」も等しく *actio* である）、「主」を「主体」と同じ意味だとすれば、「はたらきの主」であることは決して人間だけの固有性ではなく、凡そこの世界において何らかの仕方ではたらきをなしている「ものは、そのかぎにおいて「自己の行為の主」であるといわれうるのではなからうか。

一五 このことは人間以外のものもろの「もの」の中でも、特に、魂を有しているもの、すなわちすべての生物、*animata* についていえるように思われる。魂 *anima* とは、何らかの仕方で自分自身を動かすはたらきの内在的根原 *principium immanens* である。それゆえ魂を有するものは、他のすべての無生物と異なり、何らかの仕方で自分自身を動かし、自主的なはたらきをする。そのはたらきは、栄養、生殖、感覚、生長、場所的運動、等のようなさまざまな生命のはたらきとなって現れる。それゆえすべての生物は、魂にもとづく生命的なもろのはたらきをなすかぎりにおいて、単なる物体よりも秀れた意味で、やはり「自己の行為の主」であるといわれるのでは

なからうか。

一六 勿論人間は理性的動物であるかぎりにおいて、他のいかなるものよりもすぐれたはたらきを有し、すぐれた意味で「自己の行為の主」であるといえるであろう。しかしそれは程度の差であつて、本質的な相違ではないと思われる。それゆえすべてのものは、何らかのはたらきをなすかぎりにおいて、多かれ少なかれ「自己の行為の主」であつて、それを人間の固有性とすることはできない。すなわち、ただ人間だけが「自己の行為の主」であつて、人間以外のものはそうではないと断定することはできないように思われる。

一七 この疑問に対してトマスの立場から答えようと思うならば、われわれは一般に「はたらきの主体」ということと、トマスのいう「はたらきの主」ということとの意味を区別しなければならぬであろう。「主体」は *subjectum* の訳であり、「主」は *dominus* の訳である。トマスにおいては、はたらきの主体となるということ、はたらきの主となるということは、同じ意味ではないように思われる。たしかにすべての「もの」は、それが何らかのはたらきをなしているかぎりにおいて、そのはたらきの「主体」となっているということができる。しかし必ずしもはたらきの「主」となっているということはできない。では「主」とは何であるか。「主」と「主体」とは、どのように異なるのであろうか。

第三章 人間的行為と人間の行為 (三)

——はたらきの能力としての *ratio et voluntas* ——

一八 人間は自己の行為の主であるかぎりにおいて、他のすべての非理性的被造物と区別された人間としての固有性を持つ「前章」では人間が自己の行為の主であることは何に由来するのであろうか。トマスはいう。

しかるに人間が自己の行為の主であるのは理性と意志とによる「一」。

一九 これによれば、人間が理性と意志とを有するということが、人間を他のすべての非理性的被造物から区別し、人間を人間たらしめている独自性の根拠であり、これによって人間は自己の行為の主となるのである。これに対し、人間以外のものは、自己のはたらきの主体とはなりえても、自己の行為の主となることができない。それは彼らが、人間の有する理性と意志とを持たないからである。

二〇 ここで次の問題が生ずる。人間が理性と意志とを有することと、人間が自己の行為の主であることとは、どのように関係するのであろうか。そもそも「理性」とは何であるか。「意志」とは何であるか。理性と意志とはいかなる仕方で「行為」ないし「はたらき」と関わるか。

二一 理性と意志とは、行為ないし「はたらき」との関係においてみられるとき、「はたらきの能力」 *potentia operationis* として規定される。それゆえ、人間が理性と意志とによって自己の行為の主となるということは、人間が理性と意志にもとづくはたらきによって自己の行為の主となることであり、人間が人間に固有な人間的行為をなしうるのは、人間が理性と意志の能力を有しているからに他ならない。では「能力」とは何であるか。

二二 能力とは、ものが何かのはたらきをなしうる、或いはなされる可能性としてそのものうちに内在する力である。能力を有する者は、必ずしも常にその能力によるはたらきを現実に行っているわけではないが、しかし現実にはたらきをなすためには、ぜひともなしうる能力を有していなければならない。その意味で能力ははたらきに対して、可能態が現実態に対する関係に在る。

二三 それぞれのものは、それぞれのものの本質 *essentia* ないし本性 *natura* に応じてそれぞれ固有のはたらきをなす。それは、それぞれのもので、それぞれに固有なはたらきをなすことのできる能力を自己の本質のうちに含んでいるからである、と考えられる。

二四 ところで、この世界に存在するものの中には、自分自身で自分の存在を育て、養い、生長し、動き、子孫を生み出し、繁殖してゆくはたらきをなすものと、かかるはたらきをなしえないもの

とが存在する。かかるはたらきを「生命のはたらき」operatio vitae という。そしてかかるはたらきをなすのは、そのものがその本質ないし本性のうちに「生命の根原」principium vitaeを含んでいるからであると考えられる。そしてこの根原を「魂」animaという。そしてその本質のうちに魂を含んでいるものを含んでいないものと区別して、前者を生物、後者を無生物という〔一五〕。

二五 すべての生物は何らかの生命のはたらきをなすという点において共通するが、しかしそのはたらきは決して一様ではなく、多種多様である。それは、それぞれの生物の有している魂が、「生命の内在的根原」principium immanens vitaeである点においては共通するが、それぞれの有している魂の能力potentia animaeが多様様であり、その能力の多様なるにに応じてさまざまな生物の種類が生じ、またさまざまな生命のはたらきが現実化するからである。

二六 理性と意志とは、人間の本質に属する魂、すなわち、「人間の魂」anima humanaに含まれる能力であり、その能力が現実化される時、人間に固有なはたらき、すなわち、人間的行為actio humanaとなるのである。しかし、人間は、その能力としてただ理性と意志だけを有しているわけではない。人間の魂はそれ以外にもなおいくつかの能力を有している。それゆえ正確には、人間は魂の能力の部分pars potentiae animaeとして理性と意志とを有しているというべきであろう。では人間はそれ以外にいかなる能力を有する

か。それらの能力の中で、理性と意志とはいかなる地位を占め、いかなる役割を演ずるか。これを知ることは、人間における理性と意志の意味をより深く理解するために役立つであろう。

第四章 人間的行為と人間の行為 (四)

—— ex voluntate deliberata の意味 ——

二七 人間は理性と意志とによって自己の行為の主である〔一、一八〕。この場合、「理性と意志とによって」per rationem et voluntatemといわれるこの「よって」perとは何を意味するか。既に見られたように「前章」、理性も意志も魂の能力potentiaである。能力は可能態potentiaである。これに対し、「行為の主」dominus suorum actuumといわれる「行為actusは現実態actusである。それも「はたらき」actio, operatioとしての第二現実態actus secundusである。すなわち最高度に完成された現実態である。

二八 それゆえ「理性と意志とによって」といわれる場合のこの「よって」は、人間がまさに理性と意志とを有することによって、すなわち、理性的意志的存在者であることによって、直ちに自己の行為の主であるという意味ではなくて、人間は本性的に所有している理性と意志の能力をはたらきに転ずることによって、すなわち、理性と意志の可能態を完全に現実態化することによって、自己の行為の主と成る、という意味に理解されなければならない。

二九 ここで次の問題が生ずる。それは、人間が自己の行為の主と成るその行為の実現において、理性と意志とはどのように相互に関わるかという問題である。そもそも理性と意志とは人間の有する相互に区別された二つの能力である。それゆえその現実態としての理性のはたらきと意志のはたらきとは、相互に区別された二つのはたらきである。しかるに自らの行為の主となるといわれる場合の「行為」actusは、一つのはたらきである。それは理性という能力だけのはたらきではなく、意志という能力だけのはたらきでもなく、理性と意志とはたらきであるといわれる。では人間の一つの行為において、理性のはたらきと意志のはたらきとはどのように関わるのであろうか。

三〇 これに対してトマスは次のように答えている。「考量された意志から生ずる行為のみが、固有の意味で人間的行為であるといわれる」[一]。ここに「考量された意志」voluntas deliberataといわれる表現のうちに、人間的行為、すなわち人間がその主となる行為を成立たしめる理性と意志とはたらきとその役割、その相互関係が示されている。われわれはこの表現を手がかりとして、人間がその主となる行為における理性のはたらきと意志のはたらき、及び両者の関係について考察してみよう。

第五章 人間的行為と人間の行為 (五)

—— voluntas deliberata における ratio の役割 ——

三一 第一に、人間的行為において、「理性」のはたらきはいかなる役割を演ずるか。「考量された意志」という表現のうちには、表面的には「理性」はあらわれない。しかし「考量された」deliberata ということばのうちにはそれは暗示されている。なぜならば、「考量すること」こそは、理性のはたらきだからである。では「考量する」とはいかなることであるか。理性は何について考量するのであるか。

三二 「考量する」と訳されたラテン語 deliberare の原意は、「秤libra にかける」ことである。そこから、或る事柄について「慎重に考慮する」to engage in careful thought [OLD] という意味が出てくる。只今問題になっているのは「行為」actio, actus である。それゆえ、或る行為についてそれをなすべきか否かについて慎重に考慮するのが、只今の場合の deliberare の意味である。そしてかかるはたらきをなすのが「理性」ratio である。そこで理性の「考量」がなされるための条件について考えてみよう。

三三 まず理性が或る行為について、「なすべきか否か」と考量することができるためには、まずそれについて考量されるべき行為が理性の前に提示されていなければならない。では理性の前に提示される行為はいかなる性格のものであるか。

三四 その行為は、既に行為されてしまった行為として過去の提示されているのではない。既に行為されてしまった行為については、行為されるべきか否かを問うことは不可能である。また現に今、私が行為しつつある行為についても、行為されるべきか否かを問うことはできない。行為されるべきか否かが問われうるのは、まだ行為されていない行為、その意味で未来的行為でなければならぬ。

三五 しかしながら未来的行為といっても、いつか知らぬ未来にするかも知れない行為ではなくて、今それをなすべきか否かとして私の面前につきつけられている行為でなければならぬ。それはしたがってある漠然とした行為一般ではなくて、するかしないかという二者択一の仕方で現在の私の前に鋭く個別化され具体化された形で示されている行為でなければならぬ。

三六 その行為は上記の意味で未来的、すなわち未だ私によってなすかなさぬかが定められていない、という意味で未来的であるが、しかし必然的であつてはならない。すなわち未だやつてはいないが、どうしてもやらざるをえない、やるしかない行為であつてはならない。もしもそのように必然的であるならば、それについてやるやらぬを考量する余地はないからである。

三七 それはまた、やることができないう行為であつてもならない。私の眼前につきつけられている行為が、私にとって絶対に不可能な

ことであるならば、それについてやるかやらないかを考量する余地はない。それゆえ私によって考量されるべき行為は、必然的行為でもなく、不可能な行為であつてもならない。

三八 それは可能な行為でなければならぬ。すなわち私はまだそれをするかしないか決定しておらず、その前に考量しなければならぬが、それについて考量しうるためには、やるかやらないかを別として、それはやればできることから、すなわち「なされること」がら「agibilia」でなければならぬ。かくて理性が或る行為について、なすかなさぬかを考量しうるためには、それは過去でもなく現在でもなく未来であり、それを遠い未来ではなく、現前に迫っている最も近接した未来であり、しかも必然的でなく不可能でもなく、しようと思えばすることのできる行為でなければならぬ。しかも理性がそれについてするかしないかを考量できるために、現前に迫っている行為が、そのような「なしうる行為」agibiliaとして理性によって知られていなければならぬ。

三九 ところで理性がそのような行為について考量するとき、理性は具体的にいつてどのようなことについて考量するのであるか。そもそも考量するとは、既に述べられたように「三二」もともと「秤にかける」ことである。「秤にかける」ときは、二つのものが比較されているのである。理性はもともと比較comparatioの能力として二つのものにかかわるのである。理性が行為について比較考

量する場合、理性は何と何とを比較するのであるか。

四〇 行為に関する理性の比較考量には、二つの場合があると思われる。一つは、二つの可能的行為（A、B）が与えられていて、このA、Bについて、「比較し、いずれをなすべきかを考量する」という場合である。一つは、可能的行為はただAだけであり、このAについて、それを「する」と「しない」とを比較し、「Aをするか、しないか」を考量する場合である。いずれにしても、行為について理性の比較考量がなされるためには、行為をするかしないかは一方的に決定されておらず、選択の余地が理性に与えられていなければならない。

四一 たとえ事実上、選択の余地が与えられているとしても、そのことを前以て知らなければ理性はいずれをえらぶべきかを考量することができない。また事実上、選択の余地がない場合、すなわち、それが必然的に一方に決定されている場合、あるいははじめから不可能な場合には、するかしないかを比較考量しても全く無駄である。それゆえ理性は、より慎重に考量する場合には、するかしないかを考量する以前に、まず以て、その行為は可能であるか必然であるか不可能であるかについて考量し、可能であることが知られた場合には、その可能的行為はいくつあるか、すなわち、二つか、三つか、それ以上あるか、一つしかないか、について比較考量し、その上で、二つの場合はAかBかを、一つしかない場合はAをするかしないか

を比較考量するであろう。これらすべてにわたって、「比較考量する」ことが理性のはたらきに属するのである。

第六章 人間的行為と人間の行為（六）

——ratioによって考量されるべきことから——

四一 理性が行為においてさしあたり考量すべきことからは、現在なすべきかなすべからざるかの選択を迫られていることがらについて、そのいずれを取るべきかを考量することである。そのさい理性の考量すべきことがらとして与えられるものに二つの場合がある。一つは、なされうることとしてAとBという二つの行為があり、AをなすべきかBをなすべきかについて理性の考量が要求される場合であり、一つは、なされうることとしてただAという一つの行為だけが与えられており、Aをなすべきかなざるべきかについて理性の考量が要求される場合である〔四〇〕。

四二 いずれにしても、理性の考量は行為の二つの可能性（なすかなさないかの場合をも含めて）のうちから一方を選ぶことに向けられる。そのため理性の当面の仕事はこの二つの可能性について比較考量することである。その比較は、Aという行為とBという行為との比較であるか、或いはAをする場合としない場合との比較である。要するに二者を比較することである。これは比較としては最も単純であり、きわめて容易になしうることのように思われる。

四四 しかしながらよく考えてみると、この比較は容易ならざるものであり、多くの場合きわめて困難であり、時には不可能であることが分ってくる。ではその困難は何に起因するのであるか。それについて考えるために、まずこの比較は何にもとづいて行われるべきかについて考えてみよう。

四五 最も簡単な場合として、ここに在るパンを食べるか食べないかの選択が迫られる場合について考えてみよう。「このパンを食べる」という行為と、「食べない」という行為（「食べない」ことも消極的意味で一つの行為であると考えられる）とは、それだけ単独に考えればいずれもきわめて単純な行為であり、それを比較することも容易である。しかしそれを、「今、私がなそうとする行為」として現在の私との関係においてとらえようとする場合には、なかなか容易なことではない。なぜならば、「今、私がなそうとする行為」は、私がそれをなそうとする状況との関連においてはじめて行為としての具体的意味を獲得するからである。では「状況」とは何であろうか。

四六 「状況」とは、さしあたり、行為しようとする私を取り巻いている外的環境の意味に解される。「このパンを食べる」というのは、それだけ単独に取ってみれば、きわめて単純な行為である。しかし状況によってその意味は非常に変わってくる。そのパンは友人によって好意にみちて食べるようにと私に差し出されているパンであ

るか、或いはまた、その一つのパンをめぐって飢えた人々がそれをわがものにしようとねらっているパンであるか。それは新鮮なパンであるか、古いパンであるか、等々、さまざまな状況のもとにおいて「そのパンを食べる」という行為は、物理的行為としては同じ行為でありながら、その「意味」はさまざまに変る。そして私がこのパンを食べるか否かについて考量することは、その考量が完全になされるためにはこれらの現実的状況全部についてもあますことなく考量することではなければならない。すなわち理性の考量すべきことからは、単にこのパンに及ぶのみではなくて、このパンを取りまく現実的状況にまで及び、それらすべての状況がこのパンを食べるという行為との関係において比較考量されなければならないのである。

四七 しかし或る行為がそこにおいてなされようとする「状況」は、上記のように「四六」、行為を取りまく外的環境という意味だけに限られない。行為しようとする現在の私自身の状況もまた行為の意味を決定すべき重要な因子（モメント）と成る。すなわち、このパンを食べようとする私は、そのとき空腹であるか満腹であるか。相手の好意を受けるために食べたくないのに食べようとしているか。空腹の友人にゆずるべきだと考えているか、それとも他人をさしおいても自分が食べようとしているか、等々。その行為の前にいる私の身体的、心理的、倫理的感情、等々の状況が私の行為の「意味」を決定する要因となる。私が「パンを食べる」という行為につ

いて考量するということは、それゆえ、これら自分自身の主体的ないし主体的状況との関係において（自己の行為の意味を）考量することを含まなければならない。かくて、行為における理性の考量は、行為を取りまく外的環境についてのみならず、まさに行為しようとする自分自身の内的状態についての考量にまで及ばなければならない。

四八 行為がなされようとする状況は、上記のように外的環境と行為者の内的状態という二つの側面から考察されるが、この二者は全然別箇の独立の要因ではなくて、具体的現実的状況としては一つである。すなわち具体的現実的行為は、今これこれの内的ないし主体的状態に在る私がこれこれの外的環境の中でこれこれのことをなす、という仕方で行われる。またこの二つの側面からの要因は、相互に相手の状況を規定し合う。すなわち外的環境が行為者の内的状態に何らかの影響を及ぼすとともに、逆に行為者の内的状態が行為の外的環境に何らかの影響を及ぼす。それゆえ行為について考量する理性は、行為を規定するこの内的外的要因についての比較考量にまで及ばなければならないのである。

四九 以上、われわれが或る行為をなすべきか否かについて考量する場合には、理性の考量はわれわれを取りまいて、またわれわれ自身がその環境の中でかくかくの主体的主観的状态にある、その内外すべてを含めた現在の状況の全体にまでその考量は及ばな

ければならないことをみたのであるが、それだけではない。われわれの考量は、今なすべきか否かが問われている行為との関係において、過去の私の経験全体についての反省的考量にまで及ばなければならない。すなわち過去において、現在直面しているのと似たような状況におかれたことはなかったか、その場合に自分はどうのように行いましたが、そのように行いましたことは良かったか悪かったか、等のことがなしうるかぎり想起され、現在の状況と比較されて考量されなければならない。この比較考量をなすのも理性である。すなわち理性は、或る行為をなすにあたって、その行為との関係において、自分に内と外とに関する全経験を考量するのみならず、過去の自分の経験をも想起してそれを比較考量しなければならないのである。

五〇 このように私は、或る行為をなすか否かについて考量するために、現在に到る私の全経験についてその行為との関係において考量するのであるが、それだけではない。私は時には、或る行為をなすか否かについて考量する場合に、単に自分の経験について考量するために、他人の意見をきいてこれを参考にし、また同じような状況に遭遇した場合にとった人々の行為をみて、これを想起し、これについて考え、これを現在自分の直面している場合と比較して考量する。このように他人の意見をきき、参考にし、自分の場合と比較して考察することも、理性の考量のはたらきに属している。

五一 それだけではない。われわれが或る状況において或る行為をなすべきか否かについて考量する場合、われわれは単に自分と他人との凡そ知りうるかぎりの過去から現在に到る経験を、現在直面している行為との関連において考量するのであるが、理性の考量はただそれだけにとどまらない。理性の考量は更に未来に起るべきことさらにまで及ぶのである。

五二 すなわち理性は、或る行為をなすべきか否かについて考量する場合、「もしも私がそれをするならば」と「もしもしないならば」という二つの仮定のもとに、未来において起らうべきさまざまな結果について予想し、それについて考量する。その予想そのものが、未来における外的環境とそこにいる自分の主体的状況についての推察をもとにしてなされる。そしてこの仮定のもとに起らうべきさまざまな場合を比較して考量する。かくて理性の考量は、その行為との関連において起らうべき未来の世界と自己とに関する考量にまで及ぶのである。

五三 われわれが日常生活において何かをなすか否かを考量するとき、われわれの考量はたとえ無意識にせよ、その行為との関係において過去現在未来にわたる自己と世界との状況に関わる考量に及んでいる。勿論、すべての人間がすべての行為について上記のことがらについての考量を徹底的に、完全に行って自己の現在なすべき行為について考量しているわけではない。そこにはより多くより少

なく、またより広くより狭く、またより深くより浅くの程度の差がみとめられる。しかし何人といえども、何らかの行為をなすに当って、上記のような理性の考量を全然しないで行為する者はない。すなわち何人もその行為において、現在なすか否かが考量されているもとに、「するかしないか」の考量に到る前提となつて自己と自己を含む世界についての無数の考量が存在し、それら無数のかくれたる考量の頂点に、いわば氷山の一角におけるごとくに、「この行為をすべきか否か」の考量がなされているのである。そして理性のほたらきは単にこの尖端の「するかしないか」の考量においてのみならず、かくれて本人にも気づかれない過去、現在、未来にわたる自己と世界とについての無数の考量においてはたらいっているのである。

第七章 人間的行為と人間の行為 (七)

—— Plato の考察の行われるべき空間 ——

五四 われわれが何かをなす場合、自然の必然性によつてなし、或いは絶対に抵抗することのできない外部からの自然的、人的な強制によつてこれをなす場合には、理性の考量をはたらかせる余地はない。理性の考量がはたらきうるためには、なすこともなさないこともでき、或いはAをなすこともできBをなすこともできるという可能性の余地が自分に与えられていなければならぬ。その可能性の余地は、そこにおいて理性があれこれと考量することができ、ま

たそこにおいて意志がいずれか一方を決定できる一種の空間である。それは自由の空間であり、そのような空間を有するのはただ人間ののみであり、そこにおいてはじめて人間的行為が成立するのである。

五五 しかしこれに対しては次の反論が予想される。なすべき行為の決定にさいして理性の考量が現在の状況全体に及ぶということは、いいかえれば行為にさいして状況判断をするということである。しかし行為にさいして状況判断をするということは、ただ人間だけのなすことではない。注意して観察するならば、多くの動物が、いや殆どすべての動物がそれぞれの仕方で行為にさいして状況判断をしているのである。たとえばネコを見よ。ネコは片すみにうづくまつて容易に動かないが、彼はただ居眠りをしているだけではない。居眠りをよそおいながら、実はきわめて慎重に状況判断をしているのであり、動くか動くべからざるか、どちらの方向に動くべきかを綿密に情報を集め比較考量しているのである。その意味でネコも行為にさいして考量し判断すべき自由の空間を有しているのであり、これをする能力が理性であるとするならば、ネコも理性を有しているといわなければならない。しかもこれはネコに限らない。よく観察するならば、何らかの仕方で行うことができる生物はすべて、綿密な状況判断をたえず行いながらその都度の行為をしているのであり、このような状況についての考量をなす能力を「理性」と名づけるとすれば、理性を有するのはただ人間だけではない。殆どすべ

ての動物がその意味での「理性」を有しており、「理性的動物」は人間を他の動物から区別する種の定義ではなくて、却つて反対に殆どすべての動物を包含する「類的名称」*nomen generis*となるであろう。このような反論に対して「理性」が「人間」に固有であることを弁護しようと思うならば、われわれはどのように応えるべきであろうか。

第八章 人間的行為と人間の行為 (八)

—— 理性と感覚との相違についての問題 ——

五六 人間が現実の世界において何らかの行為をなすとき、AをなすかBをなすか、或いはAをなすか、なさないかについて理性の考量がなされるが、この考量に到る前提として理性は、直面する現実の状況と未来に起るべきことから無数の考量をしている。すなわち、一見単純なAをなすかBをなすか、Aをなすかなさにかについての考量は、その背後に彼がそのうちに今いる現実(未来をも含む)的状況についての理性による状況判断を前提し、その上に成立している。

五七 では、理性がそれについて考量すべき素材となる現実的状況についての情報を直接に理性に伝えるものは何であろうか。それは身体の有する諸感覚である。人間は身体によつて現実の世界のうちに生き、感覚をはたらかせて世界に現在起りつつあることについ

ての情報を集め、それについて考量するように理性に提供する。たとえばそれが人間の語ることばであっても、それはまず人間ののどから発する音声として耳の感覚を通してそれを聞く人のうちに入ってくる。一切の考量すべき情報は、先ず身体の感覚を通して現実の世界から人間のうちに入ってくるのである。

五八 しかし理性はこのようにして感覚を通して入ってきた現実世界の状況について考量するだけではなく、その考量にもとづいて今自分がなすべきことについて判断するのである。AをするかBをするか、Aをするかしないかについて考量する理性は、何を基準としてその判断をなすのであろうか。ただ現実の状況がこれこれであると判断するだけでは何をなすべきかという自己の行為についての考量はでてこない。自己の行為についての考量がなされるためには、ただ世界についての客観的認識だけでは足りない。そのような状況のうちに存在する自分自身についての認識がなければならぬ。すなわち、世界の状況のみならず、自分の現実の状況について知られ、それについての考量がなされていなければならない。したがって今私は何をなすべきかについての理性の考量は、現在かくかくの状況に在る自己は、かくかくの状況に在る私が直面している世界の中で何をなすべきかという考量として、世界の現状についての考量とともに自己の現状についての考量を前提として始めて成り立つのである。

五九 では、そのような自己と世界についての考量を前提として、いよいよ今自分は何をなすべきかについて考量しようとするとき、私は何を基準として考量するのであるか。そもそもわれわれが何かをなすのは、われわれが生きている証拠であり、また生きるためにすべてのことをなすのである。また反対に、それをなすことは生にとって不利だと判断したとき、われわれはそれをなさないのである。それゆえ行為について、なすべきか否かについての考量は、自己の生をもとにして、自己の生を目的として、すなわち「生きんがために」ということを目的にしてなされている。この意味で理性の考量は生命のためにはたらいており、人間の生命のはたらきの一つあらわれであることができる。

六〇 もつとも「生きる」といっても、その目的は人によって多様であり、それによって行為の基準となる生の意味も変ってくる。或る人にとって生きる目的は、他の人にとっては生きる目的ではない。したがって、同じ現実的状況に在り、同じ状況判断をしながら、それにもとづく行為の在り方は人によって異なることがある。しかしいざしれにしても、各人は自分が生きる目的であると思うものによって生き、行為しているのであるから、その生き、甲斐がどこに在るにせよ、いざれも生きるために行為し、生きることを目指して現実的状況のもとに自己のなすべきことについて思量しているといえるであろう。

六一 もしもそうであるとすれば、われわれが前章において出会った反問がまた生じてくるのは当然である。すなわち、われわれ人間が具体的に行為するに当って、自分がそのうちに生きている自分の状況をも含めた現実的世界についてなしうるかぎり理性をはたらかせて考量するということは、何も人間だけに固有なことではなく、多くの動物たちがやっていることではないか。

六二 じつさい、さまざまな動物が、それぞれ固有の鋭い感覚をはたらかせて、彼らが生きている世界空間のうちに起っている出来事についての情報を集め、そこからわれわれ人間には知られない未来の出来事までも確実に推理し、それにもとづいてなすべきことをきめている。そこには既に人間の理性に似たはたらきが認められるではないか。

六三 更に、多くの動物は彼らを取りまく外的環境としての世界についての豊かな情報を感覚を通してえているだけではない。自身自身の状況についての認識をも有している。それゆえ自分にとって不利なる行為はこれを回避し、自分にとって有利な行為はこれを取る。この場合、自分にとって有利か不利かを知るために動物は何らかの目的を以って行為しているのでなければならぬ。その目的は彼らにとっても人間の場合と全く同様に「生きる」ことである。

六四 人間も動物も、生きるために行為し、行為することによつ

て生きる。生きるということを究極目的にして、それぞれの動物は生命の維持と発展のために必要な情報を、彼らが生きている世界から鋭敏な感覚をはたらかせて多量に摂取する。それにもとづいて行動する。とすれば、そこには既に、理性の考量に似たはたらきが動物においても認められるといわなければならない。

六五 なぜそれは人間の場合は「理性」のはたらきであり、動物の場合は理性ではなく「感覚」のはたらきであるというのであるか。それは人間の手前勝手な独断ではないか。動物も人間もこの世界において生き、生きのびてゆくために、現実的状况についての情報をなしうる限り多くとらえてそれについて考量し、それによって自己の行為を決定してゆくというその生き方においては全く同じではないか。理性といい感覚というも、本質的には同じ能力であり、それを人間の場合「理性」と呼ぶとすれば、同じ理性を多くの動物もそれぞれの仕方でも分有し、理性に属する或る能力に関しては、人間にまさる理性の力を有しているというべきではないか。

六六 このように考えてくるならば、静かにかべにとまっていたヒゲだけを微妙にふるわせているゴキブリのヒゲも、高い鉄塔にはりわたされた無線電信のアンテナも、本質的には同じものであり、ゴキブリのヒゲの延長線上にアンテナを置くことも、まちがいでないように思われてくる。人間が誇る「理性」は動物の感覚の発達した一つの形態であり、否、それを「発達した」と思うのは人間の

うぬぼれであつて、じつさいは、人間の有する「理性」は動物が一般に有している感覚の人間における一つの変容された形態にすぎないのではないか。このような異論に対してわれわれはどのように答えるべきであるか。いや、果してそれに答えることができるであらうか。

第九章 人間的行為と人間の行為（九）

—— 技術的理性についての問題 ——

六七 もしも「理性の考量」ということをただ生きる目的のために理性をはたらかすという次元においてのみ捉えるとすれば、このような異論に対して答えることができない。そのような次元で捉えられた「理性」は、動物がそれぞれ生きるためにはたらかせている感覚や本能と本質的に異なるものではない。それはただ感覚や本能の進歩発達した形態として、感覚や本能の延長線上におかれうるのであらう。

六八 そもそも理性の進歩発達そのものが、生きるために人間と自然とのたたかひ、人間と動物とのたたかひ、更にそれに加えて、人間と人間とのたたかひを通して実現されてきたのである。技術の歴史は人間と自然とのたたかひの歴史の上に成り立っている。そして更に、このことはふつう技術の歴史の上にあらかさまには述べられないが、人間と人間とのたたかひの歴史の上に成り立っている。

人間は人間に打ち克つためにあらゆる技術を開発したのである。そして事実、技術において相手に優越する者が相手をたおすことができたのである。戦争のたびごとに、技術は飛躍的に進歩した。そしてかかる技術を開発した原動力は理性であつた。その意味でたしかに理性は、人間が他のすべての被造物にまさり、人間を人間たらしめるすぐれて人間的な能力であるとともに、それを尺度として或る人間が或る人間にまさり、或る民族が或る民族にまさると判断される能力でもある。じつさい理性においてまさる人間は成功し、理性においてまさる民族は他の民族を支配するのである。

六九 しかしながら、このように捉えられた「理性」とは、人間が生きるための能力であり、理性においてすぐれているとは、生存競争に打ち克つて相手をたおし、支配する能力である。そして人間はこの理性において他の一切の被造物にまさるがゆえに一切の被造物を支配し、またこの理性において秀れた民族が、理性において劣る諸民族を支配するのは当然であり、またそれが歴史的事実であると考えられてきたのである。

七〇 しかしながら、少し観点をかえて考えると、このような意味での「理性の優位」の思想は、甚だ疑わしいものになつてくる。たしかに人間はその理性の力によつて自然を開発し動物を支配し人間の支配する世界をひろげてきた。人間の支配権の及ぶ領域においては、たしかに「理性の優位」の思想は妥当する。しかし人間

の支配する世界の外に一步出たならばどうであろうか。たとえば熱帯地方のジャングルの中に、或いは太平洋の真中に投げこまれたらどうであろうか。ジャングルを支配するものは人間ではなくて猛獣毒蛇であり、太平洋を支配するものはフカヤサメであり、その中に投げこまれた人間は忽ちにしてこれらの支配物によって食いつくされるであろう。そのように考えるならば、「理性の優位」の思想が妥当するのは、ごく限られた人間の努力の及ぶ世界だけであり、その世界は、地球全体、宇宙全体の大きさに較べたら、そのごくごく小さな部分にすぎない。

七一 技術においてすぐれた民族はすぐれた武器を作り、それによって、技術において劣った民族を征服して強大な国家を造った。しかしその強大な国家を維持するために、更に強大な武器を造らねばならぬ。そのため技術的理性において秀れた人材が国々から集められ、高給を以て雇われて新しい武器の開発のために緊密な組織と研究計画のうちに組みこまれて研究に専心する。更にその成果を実験し、実行するために強大な施設が建造される。そのために国家はばく大な費用を必要とし、その金を国民から税金としてしぼり取る。このようにして戦争はなくても戦争を防衛するための技術戦争がたえることなく続いている。そのために人間の理性のエネルギーが集中的に投入されている。

七二 しかしながら、このような状態が無限に続くとは思われな

い。なぜならば、いかに強大な国家といえども国力には限りがあり、資材にも人力にも限りがあるからである。またもしも革命的に新しいエネルギー源が発見されるならば、これまでのエネルギー源をもとにして研究されてきた技術は、一朝にして時代おくれとなるであろう。これまでの技術をもとにして開発され建設されてきたほう大な設備は、ただちに廃墟と化するであろう。そのような日が来ないとは、何人も断言できない。却って反対に、そのような日が早晩くることは、これまでの技術と発明の歴史にかんがみて、殆ど必然的であるように思われる。そのとき廃墟と化した歴大でグロテスクな施設を眺める人は、いったいこれを造るためにしぼり出された「理性」の努力とは何であつたかと疑うであろう。

七三 更に、このような技術の進歩によって、人間が生存競争に打ちかち、他のすべての非理性的な動物を支配するというのも妄想ではなからうか。もしそれが妄想でないならば、次のような未来の像をえがくことも、あながち妄想とはいわれないであろう。すなわちいつか、人間が理性の限りをつくして開発した武器によって最後の戦争をし、その武器の強大な破壊力によって殆どすべての人間が死滅し、生き残った人間たちも放射能をあびて白血病となり、衰退の一路を辿るとき、放射能によって異常に肥大したアリ族が病みおとろえた人間を好餌として悉く食いつくす。このとき「理性」によって生存競争に負けたのは理性を行使した人間であり、結果的にはアリ族が生存競争に勝つたことになりはしないであろうか。

七四 「理性の考量」における「理性」を、人間が他の者との戦いに勝つて生きぬくための技術の能力の意味にとり、ただその意味だけに局限するとすれば、理性は人間がそれによって他のすべての被造物にまさるところの人間固有の能力であると主張することができない。むしろ次のように考える方が公平であろう。この世界にはさまざまな生物がさまざまな仕方できている。それぞれの生物に、それぞれ固有の生きるための能力が与えられている。それらの能力のいずれがいずれにまさるかということは、絶対的な意味では断言できない。人間には人間固有の能力が、生きるために与えられている。それが「理性」である。たしかに理性によって或る点において人間は進歩し、また自然の或る部分を支配してきたが、それは自然全体からみればごく小部分にすぎず、それを以て人間が万物にまさると誇るほどのものではない。人間は「理性」という能力においては、たしかに他の自然物にまさっている。そのことは認めてもよいであろう。しかし他の生物にもそれぞれにすぐれた能力がある。これらと比較して、人間はその理性のゆえに万物にまさる者であるなどと断言的に主張することはできないように思われる。

七五 それでもなお、人間は理性によって万物にすぐれていると主張しようと思うならば、われわれは人間の「理性」に、何か技術の能力以外の、或いはそれ以上の能力があり、それによって万物にまさるのであることを示さなければならぬ。しかし人間の理性に、果して上記の能力以外の、またそれ以上の能力があるのだろうか。

もしあるとすればそれはいかなる能力であり、またそれは、いかなる意味で他のものにまさる能力とされるのであろうか。

第二〇章 人間的行為と人間の行為（二〇）

——反省的理性の問題——

七六 もしも「理性の考量」ということを技術的理性の次元に限って考えるならば、人間は理性によってすべての被造物にまさると絶対の意味でいうことができない。ただ相対的な意味でいうことができるにすぎない。すなわち技術の進歩という点ではたしかに人間は他の動物にまさる。というよりはむしろ技術を進歩させたのはただ人間だけであり、他の動物にも技術に似たごく初歩的なものを見出すことができるにしても、それを異常なまでに進歩させることは、ただ人間にしかできなかった。そしてこのような巨大な技術の進歩の根原となったのは理性であるから、この意味で人間が理性において他の動物にまさるといふことについては、何人も異論をさしはさむことができない。

七七 しかしここからして、故に人間は絶対的に他の動物にまさると結論するのは飛躍であり、独断であると思われる。むしろ人間は理性においてユニークな存在であるというべきであろう。なぜならば、このような理性を有するのはただ人間のみであるから、理性の有無だけをもって人間と他の動物を比較しそこから人間の優越性

を結論することはできないのである。じつさいそれぞれの動物は他の動物の持たないユニークなものを持っているから、人間は理性というユニークな能力を持つから他の動物にまさるといふならば、同じ論法を用いて、象は他の動物の持たないユニークな鼻を持つから、他の動物にまさるといふなければならない。

七八 更にまた、理性を技術的理性の次元に限って考えるならば、かかる理性の考量が人間の自由の根原であるなどとは到底いうことができない。人間における技術の進歩には自由よりも自然必然性を感じさせるものが多い。勿論それは、動植物が成長するのと同じ自然必然性ではない。しかし技術の進歩そのものは、それに独自の必然性を辿ったのではないか。また現在も辿りつつあるのではないか。そして技術の進歩のテンポの速さの増加に比例して、その必然性は増加しているのではないか。技術者が自由なる創造活動によって新しい技術を開発するのではなくて、機械の進歩のすすむべき方向は機械の構造そのものによってあらかじめ決定されており、技術者はその線にそって新しい技術を開発するというよりむしろ開発せしめられているのではなからうか。

七九 それゆえ、理性によって人間は他の動物にまさるといふ命題に何らかの真理性が含まれているとするならば、そして人間が他の動物にまさる理由が「自由」ということに在るとするならば、われわれはその理性の意味を、ただ技術的理性に限ってはならない。

たしかに技術的理性は、われわれ人間の眼に偉大と思われる多くのものを生み出し、それらの技術の所産は、或る領域における人間の行為をいちじるしく自由ならしめたが、そのような自由は反面にこれまでになかった不自由を生じせしめた。真実の意味での「自由」とは、自動車で速く走れるとか、計算機で速く計算できるとかいうことではないように思われる。では真実の意味での「自由」とは何か。理性にそのような自由を与える力があるとすれば、それは理性のどこに在るのであろうか。

八〇 ここでわれわれは立ちどまり、いったわれわれは今何をしているのかと考えてみよう。われわれは今、考えているのである。考えるかぎり、理性をはたらかせているのである。すなわち、理性の考量をしているのである。しかしわれわれは技術的理性によつて、考量しているのではなく、技術的理性について、考量しているのである。技術的理性によつて考量するときには、われわれは技術的理性を用いる。しかしその理性について、考量するとき、われわれは技術的理性を用いることはできない。ではその場合われわれはいかなる理性を用いるか。

八一 いったい、技術的理性について考量するとき、われわれは何をしてきたのであるか。また現に今、何をしているのであろうか。われわれは技術的理性について一般に行われている評価について、その評価は正しいであろうか否かと考えてきたのである。技術的理

性の有効性と限界とについて考えてきたのである。一言にしていえば、反省してきたのである。その反省は理性によって行われた。このような理性を反省的理性と呼ぶことにしよう。

八二 ここでわれわれは次のことを知った。人間の理性には、技術を開発してゆく力とともに、そのような理性について反省を行う力がある。前者の力によって理性の考量がなされるときも、また後者の力によっても理性の考量がなされる。ここで次の問いが生じる。技術的理性は偉大な成果をあげたが、反省的理性はいかなる成果をもたらしたか。そもそも「反省」とは何であるか。

〔追記〕

この論説は、南山大学において昭和六十二年度「キリスト教倫理学」前期講義（毎週金曜日午前九時—一〇時三〇分。四月二四日に始め、七月三日に終る。十一回）のために準備された講義録である。